

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成28年3月15日

農林水産省

北海道

1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、平成23年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	○	××	××	89
22	××	◎	×	98
23	××	◎	○	105
24	○	—	◎	107
25	×	◎	○	105
26	○	—	◎	107
27	×	◎	○	104

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み
×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(北海道は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

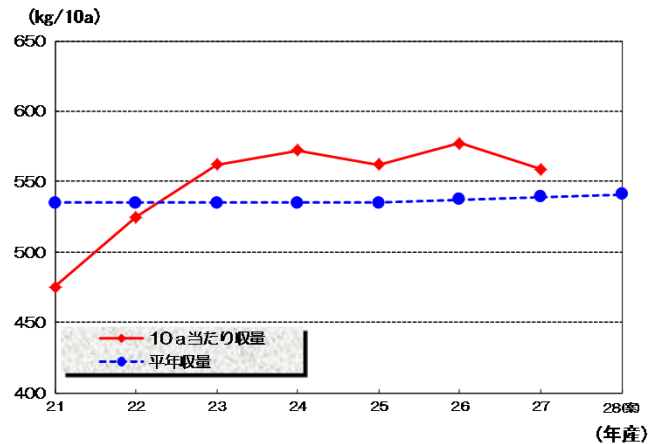
2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「きらら397」等が減少し「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等が増加する傾向にある。

また、今後、業務用に特化した高収量品種である「そらゆき」、農薬を節減かつ収量が高い「きたくりん」の作付増加が予想される。(図2表3)

なお、各品種別の収量水準の変動は少ないものの、10a当たり収量試算値の対前年差では上昇傾向となっている。(表3)

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準等



北海道	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a当たり収量	475	525	562	572	562	577	569	
平年収量	535	535	535	535	535	537	539	541
平年収量の前年差	1	0	0	0	0	2	2	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
北海道	539	556	17	565	566

図2 品種別作付面積割合の動向

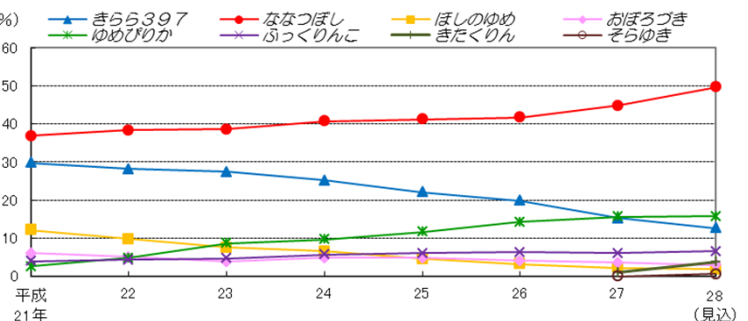


表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ななつぼし	584	38.6	40.8	41.2	41.8	44.9	49.7
きらら397	597	27.4	25.2	22.1	19.9	15.2	12.6
ゆめぴりか	561	8.7	9.7	11.6	14.2	15.6	15.7
ほしのゆめ	564	7.6	6.5	4.6	3.2	2.2	1.8
おぼろづき	554	3.8	4.8	4.8	4.1	3.6	2.9
ふっくりんこ	565	4.7	5.7	6.0	6.3	6.1	6.5
きたくりん	591	—	—	—	—	1.1	3.8
そらゆき	646	—	—	—	—	0.0	0.6
*はくちょうもち	556	2.8	2.5	2.5	2.6	2.2	1.9
*きたゆきもち	554	1.3	1.6	1.7	1.7	1.7	1.6
*風の子もち	582	2.9	2.5	2.6	2.8	2.7	2.4
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)							0.8

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

なお、「きたくりん」、「そらゆき」は農業団体等の情報から推計した。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 主食米等の作付動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、空知、上川等の主産地で変動は少なく、収量水準に与える大きな影響はない。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

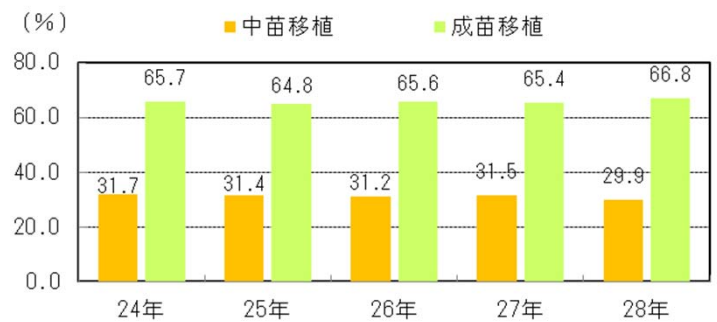
地域（地帯）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
石狩	548	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9
南空知	556	20.2	20.1	19.9	19.7	19.1	19.3
北空知	584	25.5	25.5	25.6	25.3	25.4	25.3
上川	589	26.9	26.9	26.9	27.3	28.1	28.1
留萌	532	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
渡島	506	2.6	2.7	2.7	2.8	2.8	2.7
檜山	521	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7	3.7
後志	538	4.3	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3
胆振	513	3.3	3.3	3.4	3.3	3.3	3.2
日高	502	1.5	1.4	1.4	1.4	1.3	1.4
オホーツク・十勝	485	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
10a 当たり収量試算値の対前年差 (kg)							0.0

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5年平均である。
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

4 栽培技術等の動向

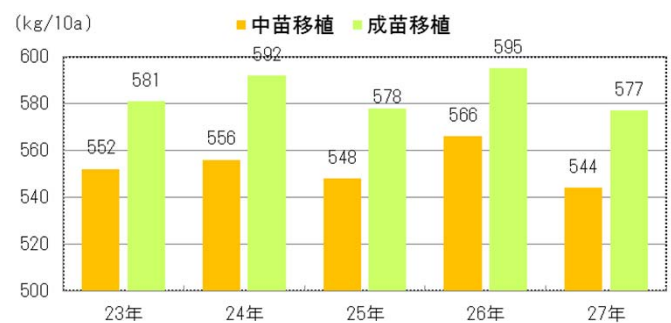
栽培技術等の動向をみると、近年、中苗移植等から収量水準の高い成苗移植に移行し、安定した栽培が確立されつつある。（図3及び4）

図3 移植方法別作付面積割合の動向



注：関係団体等の資料を基に推計した結果である。（見込み）

図4 移植方法別収量水準の動向

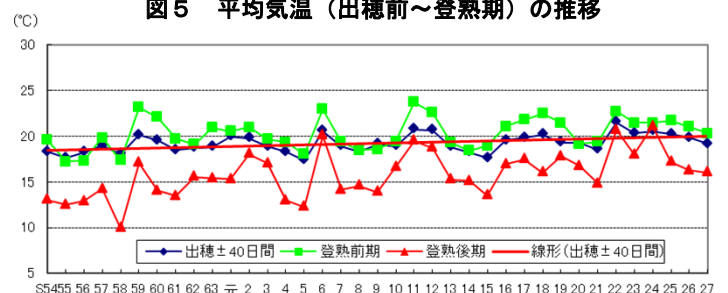


注：水稲作況調査結果より作成した。

5 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成23年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
 - ②収量水準の高い「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等の作付面積割合が増加していること、
 - ③成苗移植等高収量で安定的に生産する栽培技術が普及していること、
 - ④近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図5）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図5 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

青 森

1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向を見ると、平成22年を除き、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

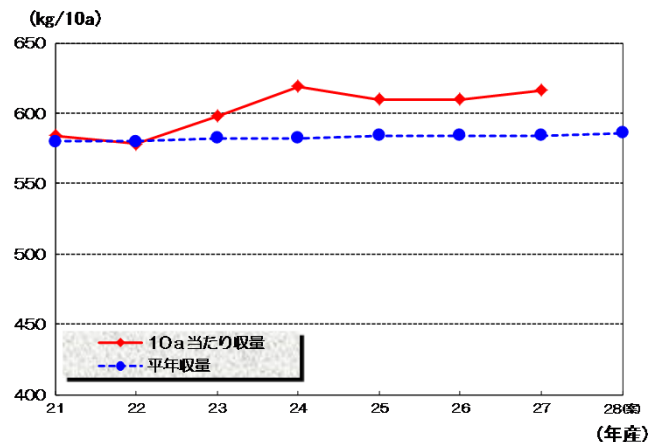
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	—	—	—	101
22	××	◎	—	100
23	×	◎	○	103
24	—	◎	◎	106
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	104
27	—	○	○	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（青森は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」、「まっしぐら」で96%を占めている。
 なお、平成27年産から収量水準は低いが良食味・高品質でさらに生産・出荷を適性に管理した新しいブランド米である「青天の霹靂」の作付けが開始されたものの、平成28年産は全体の3%程度と見込まれる。
 (図2及び表3)

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



青 森	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	584	578	598	619	610	610	616	-
平年収量	580	580	582	582	584	584	584	586
平年収量の前年差	0	0	2	0	2	0	0	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参 考)	
				5中3 平均	5か年 平均
青 森	584	604	20	612	611

単位：kg

図2 品種別作付面積割合の動向

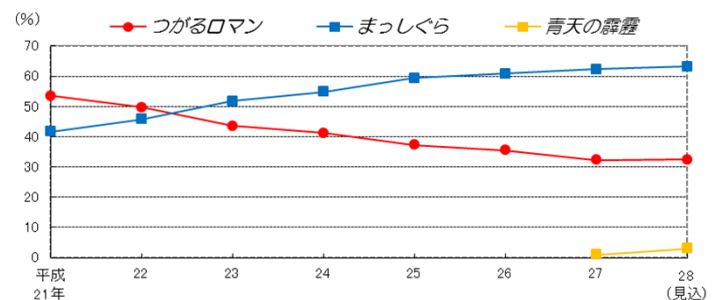


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H23	24	25	26	27	28 (見込)	
つがるロマン	604	43.6	41.2	37.3	35.5	32.3	32.5	
まっしぐら	601	51.8	54.8	59.3	60.8	62.3	63.2	
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)						△ 0.1	△ 0.1	0.0

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合を見ると、収量水準の高い津軽地帯が増加傾向、収量水準の低い南部・下北地帯はやや減少傾向となっている。（表4）

青森県では主食用米から、飼料用米に大きく転換を進め、平成27年産では約4,400ha増加し（表5）、特に収量水準の低い青森及び南部・下北地帯の割合が増加し、平成28年も同じ傾向が続くことから、主食用米の県全体の収量が増加すると見込まれる。

表4 地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
青森	590	10.8	10.9	11.1	10.9	11.0	10.7
津軽	627	59.3	59.7	59.1	59.6	61.8	61.4
南部・下北	566	29.9	29.4	29.8	29.5	27.2	27.9
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)				0.3	1.4	△ 0.3	

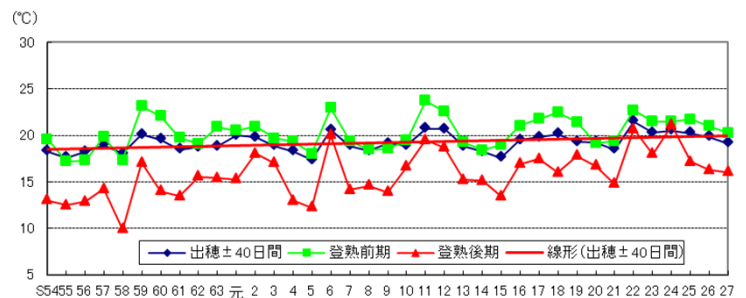
資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

表5 飼料用米作付面積等の動向

年産	面積 (ha)	数量 (t)	(参考)
			飼料用米 作付率 (%)
平成27年	7,211	41,130	14.2
26年	2,812	15,883	5.5
前年差	4,399	25,247	

資料：農林水産省調べ

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向を見ると、平成22年を除き、高めに推移し、上昇傾向にあること、
 - ②収量水準の低い青森及び南部・下北地帯の作付割合が減少していること、
 - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

岩手

1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	×	○	—	100
22	—	○	○	104
23	—	○	○	102
24	—	○	○	105
25	○	—	○	102
26	◎	×	○	105
27	—	○	○	105

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み

×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

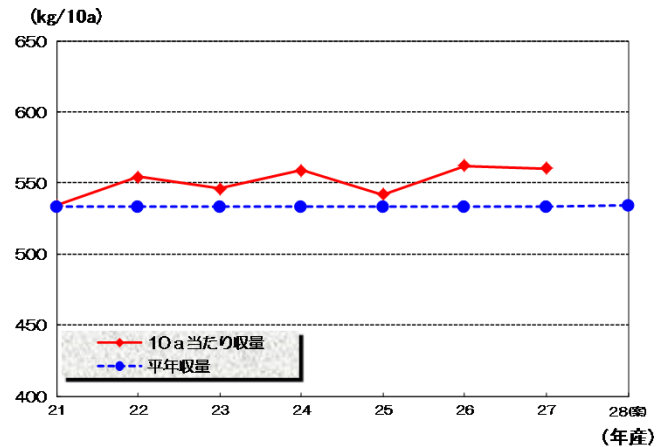
なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(岩手は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」、「あきたこまち」で86%を占めている。

比較的収量水準の高い「ひとめぼれ」が増加傾向にある。(図2及び表3)

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量水準



岩手	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	534	554	546	559	542	562	560	
平年収量	533	533	533	533	533	533	533	534
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
岩手	533	552	19	555	554

単位：kg

図2 品種別作付面積割合の動向

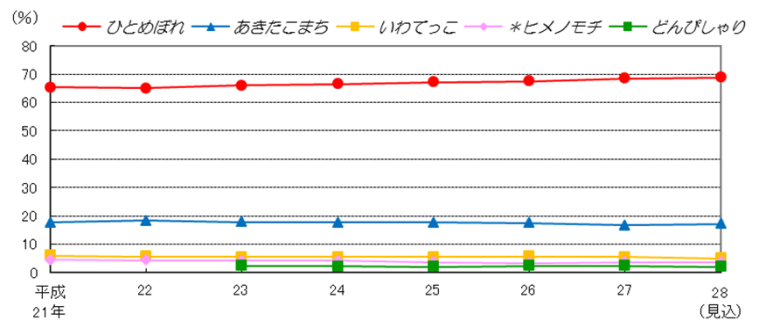


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ひとめぼれ	551	66.0	66.5	67.2	67.5	68.4	68.8
あきたこまち	555	17.8	17.6	17.7	17.5	16.7	17.1
いわてっこ	539	5.5	5.5	5.5	5.6	5.4	5.0
どんびしゃり	613	2.3	2.1	2.0	2.4	2.3	2.0
*ヒメノモチ	554	4.2	4.2	3.6	3.3	3.6	3.7
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			△ 0.1	0.0	0.2	0.0	△ 0.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合の動向を見ると、比較的収量水準の高い北上川下流地帯が増加傾向にある。

一方、東日本大震災後、収量水準の低い被害のあった沿岸部（東部・北部）は復旧が進みつつあるものの、平成28年見込と比べて、他の地帯より減少が激しい。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

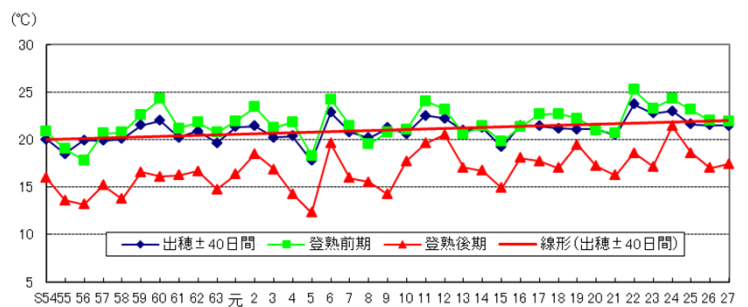
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H22	23	24	25	26	27	28 (見込)
北上川上流	574	24.5	24.6	24.4	24.9	24.5	23.6	23.7
北上川下流	550	67.0	67.7	68.0	67.5	68.1	69.4	69.3
東部	494	3.1	2.6	2.5	2.5	2.7	2.7	2.7
北部	513	5.4	5.1	5.1	5.1	4.7	4.3	4.3
単収試算値の対前年差(kg)			0.5	0.0	0.1	△ 0.1	△ 0.1	0.0

資料：水稲作況調査結果等による。
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

4 収量水準の動向

- ①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
 - ②東日本大震災後、収量水準の低い東部・北部の作付割合が減少していること、
 - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

宮 城

1 近年の10a 当たり収量の動向

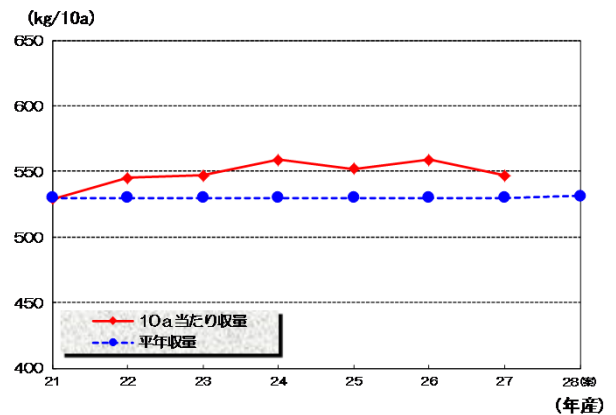
近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	—	—	—	100
22	×	○	○	103
23	○	—	○	103
24	—	○	○	105
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	105
27	○	×	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み
 ×：やや多い ××：多い
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮城は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



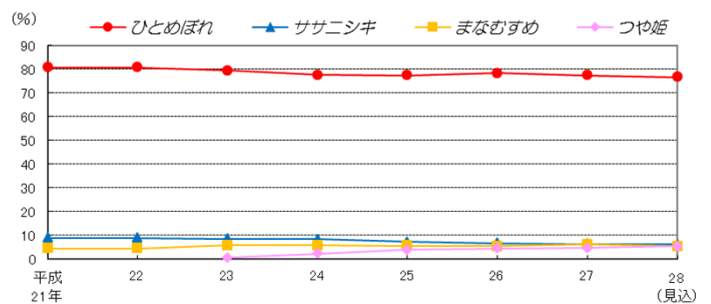
宮 城	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a 当たり収量	529	545	547	559	552	559	547	
平年収量	530	530	530	530	530	530	530	531
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参 考)	
				5中3 平均	5か年 平均
宮 城	530	550	20	553	553

図2 品種別作付面積割合の動向



2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が約8割を占めている。また、収量水準の高い「つや姫」が増加傾向にある。(図2及び表3)

表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ひとめぼれ	561	79.5	77.5	77.4	78.3	77.4	76.7
ササニシキ	577	8.5	8.4	7.3	6.7	6.3	6.1
まなむすめ	576	5.7	5.8	5.5	5.3	6.2	5.3
コシヒカリ	504	1.6	1.5	1.5	1.3	1.3	1.2
つや姫	578	0.5	2.3	3.9	4.5	4.7	5.4
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.4	0.1	0.1	0.1	0.0

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 地帯別作付面積割合等の動向

地帯別作付面積割合の動向を見ると、東日本大震災後の影響を踏まえ、これまで作付けが安定するまで平年収量を据置きしていたが、沿岸部（特に中部）は復旧が進み、震災以前まで回復しつつある。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

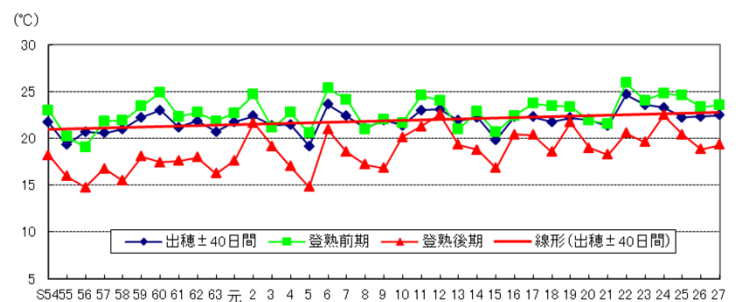
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H22	23	24	25	26	27	28 (見込)
南部	526	10.4	11.4	10.6	10.5	10.5	10.6	10.6
中部	533	19.4	13.5	16.5	17.6	17.5	17.7	18.6
北部	558	57.8	64.0	61.2	60.2	60.1	60.0	58.9
東部	555	12.4	11.0	11.6	11.7	11.8	11.7	11.8
10 a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			1.2	△ 0.5	△ 0.2		△ 0.1	△ 0.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

4 収量水準の動向

- ①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
 - ②比較的収量水準の高い「つや姫」の作付面積割合が増加していること、
 - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

群馬

1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、平成22年を除き、順調に推移している。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	×	○	—	101
22	—	×	××	82
23	◎	×	—	101
24	○	○	○	103
25	○	○	○	103
26	○	×	—	101
27	○	××	—	98

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み

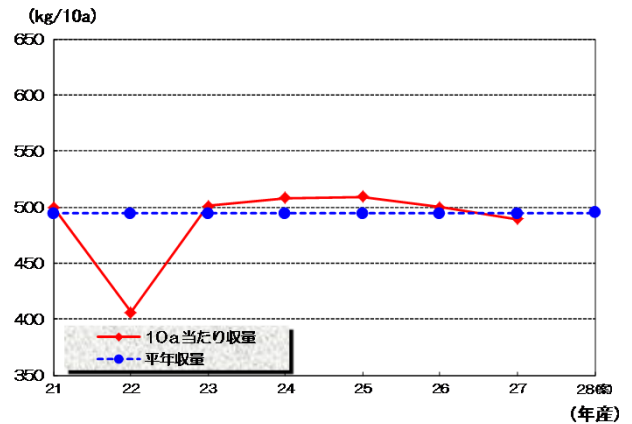
×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(群馬は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



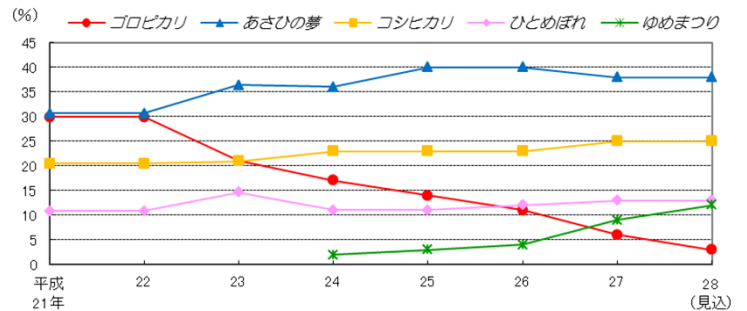
群馬	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a当たり収量	500	406	501	508	509	500	489	
平年収量	494	494	494	494	494	494	494	495
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産平年収量 ①	7中5平均 ②	平年収量との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3平均	5か年平均
群馬	494	500	6	503	501

図2 品種別作付面積割合の動向



2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「あさひの夢」と「コシヒカリ」で約6割を占めている。

また、近年、収量水準の低い「ゴロピカリ」から、収量水準がかなり高い「ゆめまつり」への転換が進み、増加傾向にある。

(図2及び表3)

表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					28(見込)
		H23	24	25	26	27	
あさひの夢	515	36.4	36.0	40.0	40.0	38.0	38.0
コシヒカリ	486	20.9	23.0	23.0	23.0	25.0	25.0
ゴロピカリ	485	21.0	17.0	14.0	11.0	6.0	3.0
ひとめぼれ	502	14.6	11.0	11.0	12.0	13.0	13.0
ゆめまつり	534		2.0	3.0	4.0	9.0	12.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.9	1.5	0.9	2.0	1.6

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 地帯別作付面積の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準の低い中毛地帯の作付割合が減少傾向にある一方、収量水準の高い北毛及び東毛の作付割合が増加傾向にある。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

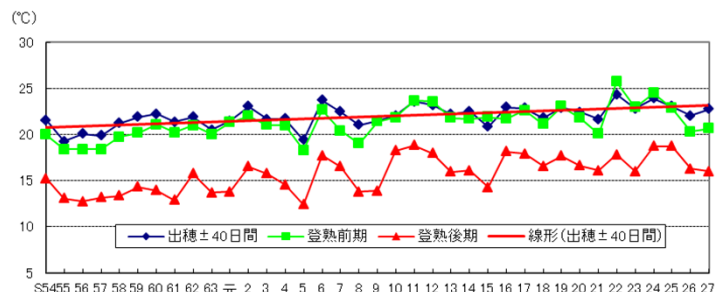
地帯（地域）名	（参考） 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（%）					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
中毛	488	47.2	46.5	45.7	45.1	43.8	43.7
北毛	525	11.0	10.8	10.9	11.0	11.9	12.1
東毛	506	41.8	42.7	43.4	43.9	44.3	44.2
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.1	0.2	0.1	0.4	0.1

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年を除き、順調に推移していること、
 - ②近年、収量水準の低い「ゴロピカリ」から、収量水準がかなり高い「ゆめまつり」への転換が進み、増加傾向にあること、
 - ③収量水準の高い地帯の作付割合が増加傾向にあること
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

新潟

1 近年の10a当たり収量の動向

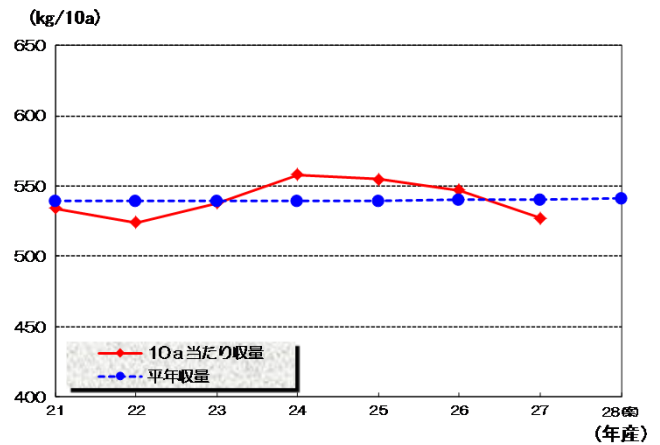
近年の10a当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移している。(図1、表1、2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	—	—	—	99
22	×	—	×	97
23	○	×	—	100
24	○	—	◎	104
25	○	—	○	103
26	○	×	○	101
27	—	×	×	97

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み
 ×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(新潟は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



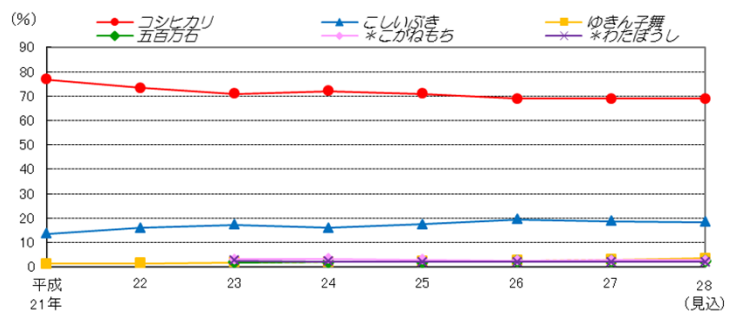
新潟	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a当たり収量	534	524	538	558	555	547	527	
平年収量	539	539	539	539	539	540	540	541
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	1	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産平年収量 ①	7中5平均 ②	平年収量との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3平均	5か年平均
新潟	540	540	0	547	545

図2 品種別作付面積割合の動向



2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約7割を占めるものの、近年減少傾向にあり、一方、収量水準の高い「こしいぶき」「ゆきん子舞」が増加傾向にある。

なお、新品種「新之助」については、平成28年の作付けは100ha程度で、平成29年産以降では2,000ha程度まで拡大する予定となっている。(図2及び表3)

表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28(見込)
コシヒカリ	544	71.0	72.0	71.0	69.0	69.0	69.0
こしいぶき	598	17.3	16.0	17.5	19.5	18.8	18.3
ゆきん子舞	644	1.8	2.0	2.2	2.5	3.0	3.5
ゆきの精	588	0.5	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2
ひとめぼれ	604	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2
五百万石	554	1.9	2.0	2.0	2.2	2.3	2.3
*こがねもち	541	3.2	3.3	3.0	2.5	2.7	2.7
*わたぼうし	569	2.5	2.2	2.1	2.0	2.0	2.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)						0.1	0.2

資料：水稲作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準に大きな影響はない。(表4)

表4 地帯別作付面積割合の動向

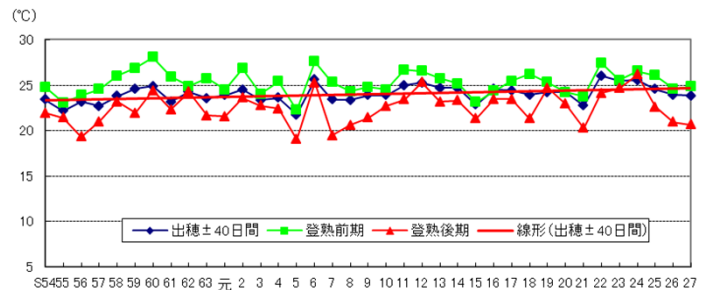
地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
岩 船	538	5.4	5.4	5.3	5.4	5.3	5.3
下越北	548	14.2	14.2	14.4	14.6	14.5	14.4
下越南	565	28.6	28.8	28.6	28.6	28.7	28.5
中 越	534	21.2	21.2	21.4	21.3	21.5	21.5
魚 沼	516	13.1	12.8	12.8	12.7	12.9	13.1
上 越	520	12.4	12.5	12.3	12.3	12.1	12.2
佐 渡	527	5.1	5.1	5.2	5.1	5.0	5.0
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)						0.0	△ 0.1

資料：水稲作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移していること、
- ②主力品種の「コシヒカリ」から、収量水準の高い「こしいぶき」及び「ゆきん子舞」への転換が進み、増加傾向にあること、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温(出穂前~登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

富山

1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移している。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	○	×	○	100
22	—	×	○	101
23	○	—	◎	103
24	×	○	○	100
25	—	○	○	102
26	○	×	○	101
27	○	—	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

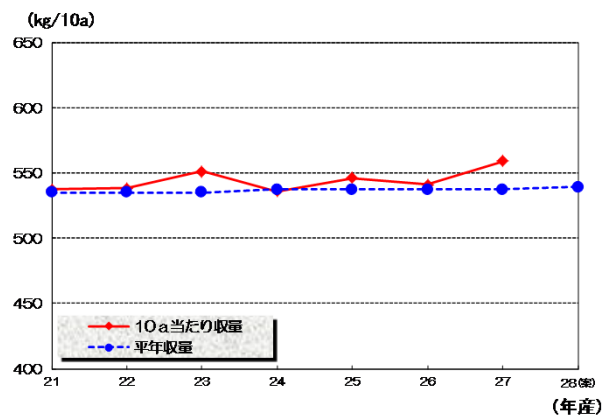
×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（富山は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約8割を占めているものの、「コシヒカリ」偏重の是正から、高温登熟でも品質が安定している早生種の「てんたかく」、晩生種の「てんこもり」が増加傾向にある。（図2）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



富山	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	537	538	551	536	546	541	559	
平年収量	535	535	535	537	537	537	537	539
平年収量の前年差	0	0	0	2	0	0	0	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産平年収量	7中5平均	平年収量との差	(参考)	
				5中3平均	5か年平均
富山	537	543	6	546	547

図2 品種別作付面積割合の動向

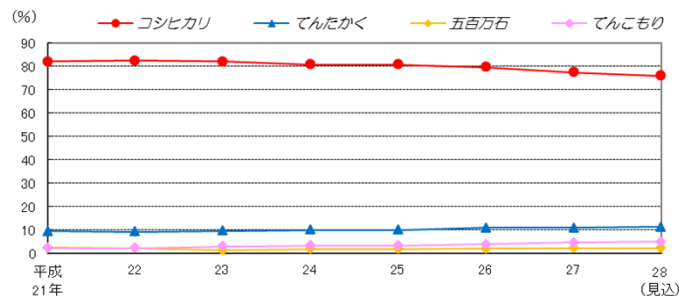


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	544	82.0	80.7	80.7	79.7	77.3	75.9
てんたかく	565	9.6	10.0	10.0	10.9	11.0	11.4
てんこもり	605	3.0	3.3	3.3	4.0	4.7	5.1
五百万石	531	1.4	1.9	1.9	2.0	2.2	2.3
10a 当たり収量試算値の対前年差 (kg)				0.0	0.6	0.5	0.4

資料：本稲作況調査結果等

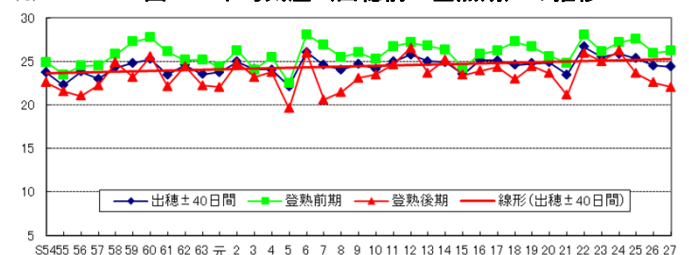
注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

3 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移していること、
 - ②主力品種の「コシヒカリ」偏重の是正から、高温登熟でも品質が安定し、かつ、高収量である早生種の「てんたかく」、晩生種の「てんこもり」が増加傾向にあること、
- から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温 (出穂前～登熟期) の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。